

「ラチャパットの日本語教育を考える会」の10年、活動と展望

花井慎行

1. ラチャパット大学について

ラチャパット大学というのは、タイのある一大学の名ではなく、ラチャパットを冠した大学はタイに40ある。これらは、もと各地にあった教育省管轄の教員養成のための機関 Teachers College であった。これ以外のいわゆる「大学」は大学庁の管轄であった。やがて、教育の普及と高等教育進学の高まりとともに、1984年からは教育学部以外の学部も設置できるようになり、1992年には英語の名称も Rajabhat Institute (以下 RI) となった。2003年に教育省、大学庁、国家教育委員会が教育省に統合され、2004年にはラチャパットも他大学と同等扱いの大学、Rajabhat University (以下 RU) となり、現在に至る。教育内容でも、RIの時までは教育省の共通カリキュラムを使用していたが、RUとなってからは、カリキュラムに関し他大学と同等の自由を得た。2006年から大学は独立行政法人化され、より一層の裁量の自由を得たが、地方の合同卒業式など、RUは現在でも一定のつながりが残っている。Rajabhat University という名であるが、設立の経緯・理念を踏まえ「地域総合大学」と訳されることが多いようである。

2. 「ラチャパットの日本語教育を考える会」について

RIでの日本語教育は、1985年に Chiang Mai RI と Phranakhon Si Ayutthaya RI の観光学科で開講された選択科目に始まる。その後日本語教育は、高等教育、中等教育共に急速に広がり、多くの RI でも日本語が開講されるようになった。しかし、RI間での日本語教育面での交流や情報交換はほとんどなかった。そのような場を望む声を反映して、2000年に Chiang Mai RI で、ラチャパットの日本語教員を対象として「ラチャパットにおける日本語教育——現在と未来——」というセミナーが開催された。この場で、情報交換を行う定期的な場を求める声があがり、そのような組織を作る方向で動き出した。2001年8月に組織作りのための世話人会が開催され、同年9月には運営委員が募集された。そして同年12月に第1回総会を開き、「ラチャパットの日本語教育を考える会」がその名称とともに正式に発足した。

現在は、会員に登録すると、総会などの案内やニューズレターのほか、会員更新の意思確認のメールも年一回送られる。ここ数年の会員数は80名前後で推移しており、本稿を執筆している時点での会員数は85名である。現在の会員はRUの教師だけではなく、他大学、中等教育機関などからの会員も多い。その会員の中から有志が運営委員となり、各係を担当し、運営に当たっている。現在の係は、代表、副代表、会計、渉外、広報、連絡、書記、アンケート、開講科目調査、補佐、である。筆者は現在RU所属ではないが、かつて2005年より一時期RUで教えていたこと

もあり、現在は補佐として、運営委員会での助言や各活動での協力を適宜している。しかしながら、2005年以前に関しては、今回入手できた各資料と、筆者の参加以前からの会員から聞いた範囲でしかわからない。筆者の参加時はまだ設立以来の会員が若干名いて、それまでの経緯などの話を聞くことができた。その会員も全て2008年3月で帰国してしまった。そのため、前半5年の情報はやや不確かであるかもしれない。

3. 活動概要

当会の活動のうち、主要なものをまとめた表である。表最上段の「01」は2001年度を指す。

表1 主な活動と実施年度

		01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11
1	総会及びセミナー	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2	ニューズレター		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3	開講科目調査	※1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	※2
4	観光シラバス作成				○	○	○					
5	主専攻会				○	○	○	○	○	○	※3	
6	タイへ新しく来る先生方の研修						○	○	○	○	※4	○
7	主専攻スピーチ大会								○	○		

※1：「カリキュラムアンケート」として、2002年2月に2001年度に関する回答を依頼

※2：2012年2月現在、2011年度分調査準備中

※3：休止中

※4：政情不安により中止、一部内容を同年7月の総会及びセミナーに盛り込む

活動はその時期から大きく三つに分けられる。会の活動開始時期から現在まで続くもの、目的を達し終了したもの、ある時期に始まり現在も存続、または一時休止中のものである。

1の「総会及びセミナー」は、原則として年2回行っており、当会の活動の中心となっている。詳細は第4章で述べる。

2の「ニューズレター発行」は、総会及びセミナーの報告を兼ねる形で発行され、2012年2月現在で22号まで発行されている。最初は郵送であったが、通信手段の発達とともに、郵送とEメール、原則としてEメールでの送信というように変化している。

3の「開講科目調査」は、ラチャパット間の情報交換の要望に応じて始められた。開始当初は「カリキュラムアンケート」という名で行われていたが、2006年からは調査内容の実態により即

した「開講科目調査」に名を変え、現在も続けられている。調査結果は各年度ごとにまとめられ、総会及びセミナーなどの際に閲覧できるようにしている。

4の「観光シラバス作成」は、当時多くのRUの観光学科の学生に日本語が教えられており、そのコースのカリキュラムやシラバス作成に役立つようにと有志により作られたものである。総会及びセミナーなどの際に閲覧できるほか、希望者にはコピーなどを提供している。

5の「主専攻会」は、主専攻を持つRUの教師が、選択や副専攻より上のレベルの指導の勉強のために始めたもので、2か月に1回程度バンコクに集まって勉強会を開いていた。現在は中心となる者がいないため、一時休止中となっている。

6の「タイへ新しく来る先生方の研修」は、2006年から始まり、現在では当会の重要な活動になっている。詳細は第4章で述べる。

7の「主専攻スピーチ大会」は、RUの日本語主専攻の学生の学習成果を発表するための場として始められたが、中心となっていた教師の帰国により、休止状態となっている。再開を望む声も多いが、当日の運営だけでなく、各RUへの参加・協力要請、審査員やスポンサーなどとの渉外も必要である。それらを行うだけの行動力ある人物がいなければ、再開は難しいかもしれない。

4. 主な活動——「総会及びセミナー」と「新しくタイへ来る先生方の研修」——

第3章で当会の活動について概観したが、ここではその中から、「総会及びセミナー」と「新しくタイへ来る先生方の研修」について詳しく説明しておきたい。これは現在の当会にとって主要な活動であるばかりでなく、会の広報や会員募集への効果から鑑みても、会の存続そのものにも大きく関わっている重要な活動である。

4.1 「総会及びセミナー」

原則年2回開催。ここ数年、前期は7月、後期は1月に開催している。参加者は、筆者が参加している2005年度以降では、20名から40名程度である。まずは現在までの開催日と主な内容を記す。通常の内容は、会計報告、活動方針案承認、事務連絡、運営方針承認などに関する総会と、セミナーとの構成となっている。学校紹介、実践報告などを総会とセミナーの枠外として行った回もある。ここではセミナーだけではなく、総会以外に行った内容を、開講科目調査報告を除き、全て記しておく。

第1回 2001年12月15日（土）タイ日経済技術振興協会

- ・ラチャ会設立までの経緯の説明
- ・討議（会の目的、タイ人教師の参加、会の代表者）
- ・ラチャパット日本語共通テスト作成情報の提供

第2回 2002年6月29日（土）ニューグローバル・バンコク事務所

- ・講演「タイ国における教育改革の進展と地域総合大学の位置」

- ・グループ討論 (授業、学校、学生について)

第3回 2002年12月14日 (土) 教育省 ORIC ビル

- ・講演「タイの後期中等教育機関 (高校) における日本語教育の現状と課題」
- ・設置科目課程別分科会——主専攻、副専攻、選択 (観光学科/観光学科以外) ——

第4回 2003年6月28日 (土) 教育省 ORIC ビル

- ・グループ討論 (クラスマネージメントや授業での悩みなどについて自由に)
- ・設置科目課程別分科会——主専攻、副専攻、選択 (観光学科/観光学科以外) ——

第5回 2003年11月29日 (土) 教育省 ORIC ビル

- ・グループ討論 (クラスマネージメントや授業での悩みなどについて自由に)
- ・実践報告①「日本語コンテスト」、②「観光学科4年生の半日ガイド」、③「ある日の授業 (自由選択科目「基礎日本語1」)」
- ・設置科目課程別分科会——主専攻、副専攻、選択 (観光学科/観光学科以外) ——

第6回 2004年7月3日 (土) 国際交流基金バンコク日本文化センター

- ・グループ討論 (クラスマネージメントや授業での悩みなどについて自由に)
- ・観光学科の観光教科書作りに向けての共通シラバス開発

観光学科のカリキュラム紹介

今までの設置科目課程別分科会 (選択観光) で挙げられた観光学科の日本語教育における問題点

実践報告①「『みんなの日本語1』に準拠した観光用教科書開発について」、②「模擬ツアーについて」

6コース終了時の到達目標設定について話し合い

講演「観光学科の日本語教育について」

観光学科用日本語教科書のシラバス考案 (グループ討論)

第7回 2004年12月14日 (土) 教育省 ORIC ビル

- ・教科書の作成について
- 観光シラバスの発表
- 教科書分析
- 講演「教科書作りの経験から」グループでの教科書作成体験

第8回 2005年7月9日 (土) Suan Sunandha RU

- ・ゲーム紹介
- ・実践報告①「タイ人学習者の『敬語の使用』についての問題点」、②「作文指導について」
- ・こんなときどうする!?

第9回 2006年1月14日(土) 国際交流基金バンコク日本文化センター

- ・報告「これが私のラチャパット」
- ・実践報告「ラチャパットの観光学科のための観光日本語用シラバス」の報告
- ・こんなときどうする?第2弾

第10回 2006年7月1日(土) 国際交流基金バンコク日本文化センター

- ・講演「教師の『やる気』とは?——『やる気』にあふれた教師でいるために——」
- ・ワークショップ「良い学びの場」を作るために——教師の「やる気」について考えよう——

第11回 2007年1月13日(土) 国際交流基金バンコク日本文化センター

- ・学習リソースアンケートの集計報告
- ・学習リソースの活用例報告
実践報告①「バンコク日本人家庭ホームステイプロジェクト実践報告」、②「大学における日本語教育での人的リソース活用の取り組み」
- ・ワークショップ「日本・日本語との接触機会をどのようにしたら設けられるか?」

第12回 2007年7月7日(土) 国際交流基金バンコク日本文化センター

- ・やってみよう!あんなゲーム・こんなゲーム
- ・わかち合おう!あんな体験・こんな体験

第13回 2008年1月12日(土) 国際交流基金バンコク日本文化センター

- ・フリートーク「誰か聞いて!私の悩み」
- ・もっと知りたい!教材のあれこれ

第14回 2008年7月12日(土) 国際交流基金バンコク日本文化センター

- ・のぞいてみよう!みんなの学校
- ・もうこわくない!らくらく描けるお絵かき術

第15回 2009年1月10日(土) Suan Dusit RU

- ・もう一度考えるみんなの仕事
基調講演「コミュニケーション上手、日タイ異文化の壁を超えて!」
実践報告①、②(表題なし)
ワークショップ

第16回 2009年7月11日(土) 国際交流基金バンコク日本文化センター

- ・のぞいてみよう!みんなの学校
- ・みんなの悩み相談室

第17回 2010年1月9日(土) 国際交流基金バンコク日本文化センター

- ・「これでいいのか私の授業」ディスカッション、講演、ワークショップ

第18回 2010年7月10日(土) Suan Sunandha RU

- ・ビザ、タイの保険、タイの日本語教育、教師間ネットワークについて(新人研修代替)
- ・グループワーク「みんなの悩み相談」
- ・ユニークでおもしろい! 教室活動! (ワークショップ形式での話し合い)

第19回 2011年1月22日(土) Suan Sunandha RU

- ・学校紹介
- ・会話試験における評価について

第20回 2011年7月23日(土) 国際交流基金バンコク日本文化センター

- ・文型の口頭練習を会話に生かそう

2012年1月21日(土)には第21回の総会及びセミナーが予定されていた。しかし、前年末にバンコクにまで達した洪水のために各機関の開講時期が大幅にずれ、適当な実施日を決めることができなくなり中止となった。その代替として、2月25日(土)に「日本語教師のネットワークを広げようの会」が開催された。内容は、会の紹介、機関紹介、グループ討論、懇親会を行った。

以上を内容面から見ると、大きく三つの時期に分けられる。初期はこの会の開催目的であった情報交換が重視されている。第6回あたりからは、観光学科の日本語が何度かテーマとなる。これは、日本語が観光学科の必修選択のような形で開講されていることが多く、そのような状況でどのように日本語を教えるかが多くの会員の興味を持つところとなっていたからであろう。そしてこれは、観光カリキュラム開発という形で、会の成果として現れる。それ以降は、ラチャパットということに限定されないテーマが並ぶ。会員はラチャパットの教師だけではなく、またクラスも必ずしも中上級までであるわけではないので、最大公約数的に初級レベルに参考になるテーマに偏っているようにも思える。しかしこれは会員構成を考えれば必然ともいえることで、今後も基本的にはこの方向で行くことになるのではないだろうか。

アンケートでは、セミナーの内容がためになったという回答とともに、いろいろな教師と知り合い意見交換ができたことを評価する回答が多い。普段日本語教育に関して話をする機会に恵まれていない教師も多く、同じく日本語教育に携わっている教師との交流という意義のある場を提供しているといえるだろう。

4.2 「新しくタイへ来る先生方の研修」

タイに来てこれから日本語教育に従事する教師のため、タイの生活や日本語教育の基本的な情報を提供しようという目的で行っている研修である。内容は主に、タイでの生活面及び日本語教育面での情報提供である。現在まで、第1回2006年5月27日、第2回2007年5月26日、第3回2008年5月24日、第4回2009年5月23日、第5回2011年5月21日と、いずれも土曜日に Suan Sunandha RU で実施されている。参加者は数名から20名程度である。

2010年には開催されていないが、実際は5月22日(土)と23日(日)の2日間にわたり、Suan Sunandha RUで実施の予定であった。しかし長期的なデモ、強制排除開始、非常事態宣言発令、夜間外出禁止令などが開催予定日近くまで続いたため、最終的には中止した。その代替として、7月10日(土)の総会及びセミナーに、内容の一部を取り入れた。

この研修を始めた経緯を記しておく。RUに対しては、以前より京都教育大学を中心とする関西6大学連合による教師派遣プログラムがあり、毎年数名がタイのRUに派遣されていた。そして、来タイ後各機関に赴任する前に、タイ語やタイでの生活に関する短期間の研修を行っていた。同プログラムで派遣され、当会の運営委員でもあった教師から、運営委員に協力の依頼があり、同時に、参加者はこの派遣プログラム以外からも広く募るという提案もなされた。それを受け入れる形で、当会の有志が協力し、第1回の研修が行われた。そのため、厳密に言うなら開始当時は当会の活動ではなかったが、現在は正式に当会の主催として行っている。

内容の構成は、第1回から基本的には変わっていない。例えば2011年の研修は、午前はタイでの生活を中心にした講義とグループ討論、午後は日本語教育面を中心にした講義とグループ討論である。自己のタイでの滞在経験を通して、知っていたほうがよいこと、起こりうる問題、その対処法や心構えなどを中心に話を進める。実は、タイに来たばかりの教師に対する研修は、タイ日経済技術振興協会(以下TPA)でも2週間程度の研修が行われていた。TPAの研修では教授法などにも時間が割かれており、それとの重複を避ける意味もあって、当会ではその面の内容にはほとんど触れてこなかった。しかし、2010年からTPAの研修が中止となることから、当会の研修にその内容を組み入れてはどうかという提案がなされ、JFBKKにも協力を要請してその方向で内容を拡充する準備を進めていたが、2010年は研修自体が先に述べた政情不安で中止となった。2011年度の研修実施に際してもこの案件が出たが、準備の時間的な問題と、運営委員でその内容を扱えるかという懸念から、従来通りの内容になった。

参加者の募集は、RUへの案内状送付や後任者へ参加を勧めるだけでなく、広報誌への掲載、他の会での広報、個人的な連絡など、様々な手段で行っている。参加者も、RU、他の大学、中等教育機関、語学学校など多岐にわたる。こちらのアンケートでも、赴任先から説明がなく不安に思っていたことの知識を得られたという回答と、いろいろな教師と知り合えて話ができたと回答が多い。運営委員の多くもまだ一、二年の滞在であり、その範囲の経験で助言をしているに過ぎないにせよ、この研修をきっかけにその後も総会などに参加する参加者も多い。他の研修がない現在、赴任する時期でのネットワーク作りという点で大きな可能性があるのではないだろうか。広報などを工夫して参加者をさらに増やすことで、この研修の意義も今以上に増大するのではないだろうか。

5. 現状、成果、課題、展望

5.1 「ラチャパット」の名を冠することについて

当会の会員は所属機関を限定していないが、RUが多いのは事実である。これは、タイ国内にRUと名がつく機関数が多いのも事実であるし、会の名にある「ラチャパット」がRUの教師の参加を促す効果があるのも一因であろう。しかし、現在の活動においては、「開講科目調査」や休止中の「主専攻スピーチ大会」以外では、特にRUに限った活動はない。そうであれば、「ラチャパット」という名を会の名前に冠する必要があるのでしょうか。実は、このことが運営委員会で討論されたことがあった。筆者の記憶では2006、7年ごろだったと思うが、運営委員会での代表選出の際、推挙された教師がRU所属ではなく、RU以外の教師が代表になることの妥当性をその教師自身が運営委員に問うたが、反対もなく、むしろ実態に即したのものとしてRU以外の所属の代表が誕生した。それから1、2年後には、当会の名称ではRU教師に限定された印象を持って参加しない者がいるのではないかと、実態を考慮すれば会の名称を変更することを考えてもいいのではないかと、という議論が運営委員会でなされた。結局は、この名だからこそRUからの参加者がある程度維持できるので、当分はこの名前のままで、他機関への広報を今まで以上に積極的にするという方針に落ち着いた。実際、2012年2月の「日本語教師のネットワークを広げようの会」でも、会員以外の参加者では半数以上がRU以外の教師である。この会の実施後、広報がまだ不十分であったという反省は出たが、それでも当面は今の名のもとに活動を続けることになる。

また、タイ人教師の（不）参加も常に問題となっている。運営委員としてはタイ人教師にも積極的に参加して欲しいのだが、実際には時折数人が参加するという程度である。実際の運営は日本人であり、総会なども日本語で進めるので、なかなか参加してもらえない。それでも、実際の教育の場ではタイ人と日本人と一緒に働く以上、呼びかけだけはある程度続けていくべきであろう。実際、毎回タイ語版の案内状も作成しており、テーマや日程によってはタイ人の参加もある。日本人中心は変わらないかもしれないが、それでもいつでもタイ人教師が参加できるような会を目指すのでなければならぬだろう。

5.2 活動の記録と資料

当会は大小様々な活動を行ってきたのではあるが、本部がないため、資料がまとまって残されていない。重要資料は代表や係が変わる毎に引き継ぎ、自分の所属機関に保管する形である。かつて、「開講科目調査」の調査に関連して筆者が資料を調べたところ、一部は代表の手元にも残っていなかった。そこで、今後の運営の参考にするために、当会やJFBKKに残っていたセミナーや開講科目調査結果などの資料を2010年に一度整理した。思えばこの10～15年は、タイでもITによって大きく環境が変わった。今は当たり前であるデータの電子化、携帯電話、インターネットなども、タイでは21世紀に入ってから急速に、まさにあっという間に広がった。現在当会で

は掲示板を運営し広報などに利用しているが、これも時代の流れで数年前に取り入れたものである。また、電子化された文書や資料は場所を取らずに保管できるが、電子化されていない文書はいったん散逸してしまうとそこにあった情報を知ることは困難であるし、どんな情報があったかさえわからなくなる場合もある。本稿のための資料を集める際にもそのことを痛切に感じた。本当はそれぞれの活動について今私が知る限りのことを記録しておきたいが、それは今後、必要と機会があれば、ということになる。

5.3 当会のこの10年の成果、課題、展望

最後に、もう一度この10年の活動と成果を振り返るとともに、現在の課題や今後の展望についても述べてみたい。

最初にも述べたように、この会の設立の目的は、第一にラチャパット間での情報交換であった。最初の数年の総会及びセミナーでは、実践報告や設置科目課程別分科会などが多くテーマとなっている。それまでほとんど交流のなかったRI、RU間での交流、情報交換が盛んになった。さらに、観光科目シラバス開発、主専攻会、主専攻スピーチコンテストなど、RUの教師と学習者双方に意義のある活動を行ってきた。その面での成果をあげると同時に、他機関からの教師の参加も増え、さらには管轄省庁の再編で「ラチャパット」という名前自体に他の高等教育機関との制度上の差はなくなってしまった。しかし、現在ではRU間の情報交換のためだけではなく、機関を超えた日本語教師の情報交換の場として機能している。

このように日本語教師が定期的集まる場としては、タイ国日本語教育研究会が既に20年以上もの活動を続け、ほぼ毎月開く定例会と年1回の総会での研究発表を活動の中心にしている。それに対し当会の活動は、セミナーという名での勉強会と情報交換を中心としている。特に日本語教育の専門でもなく、来タイ前に日本語教育の勉強をしたわけではなくとも参加でき、それぞれに何らかの成果を持ち帰ることができればというスタンスで活動をしている。

また、日本人教師はその多くが短期、ほとんどが2、3年で帰国するのではないだろうか。つまり、2、3年たてば会員はほとんどが入れ替わっているということになる。したがってセミナーのテーマで繰り返されるものもあるが、ほとんどの参加者にとっては初めてのものであり、当会はそのような参加者のために活動を続けていくことになる。研修や総会の際のアンケート、運営委員の話では、当会に参加した効果として、他教師とのネットワークができたことを評価する声が高い。特に地方に赴任すると、日本人との接触さえ限られたものとなり、日本語教育面で相談をする相手を見つける機会がなかなかない場合も多いようである。当会とても限られた回数ではあるが、そのような面で日本語教師間のネットワーク維持にある程度貢献してきたのではないだろうか。

今後の展望という点では、まさに来年度の状況も予測できないが、名称はどうであれ、日本語教師間のネットワークの形成と維持を目的に、その時々運営委員と参加者にとって意義があると思えるテーマに関して話し合える場を提供するという方針でいいのではないか。

5.4 最後に

当会の10年を追い今後の展望を述べるという趣旨で書き始めたが、限られた紙幅では割愛せねばならなかったことも多く、何よりも筆者の参加以前のことについては資料をもとに実体験もないことを述べなければならないという歯がゆさが残る。ましてや、本稿の最終稿提出直前まで第1回の総会及びセミナーの開催場所が確定できなかったことには、隔靴搔痒の感を超え、恥じ入るばかりである。さような拙稿ではあるが、瑣末ながら、ラチャパットの日本語教育、当会の活動などについて参考となるであろう参考文献をいくつか挙げておいたので、興味のある方はご一読いただければ幸いである。

参考文献

- 青沼国夫・佐々木史 (2002) 「ラチャパット日本語教育セミナーの報告」『国際交流基金バンコク日本語センター紀要』第5号、pp131-148
- 長町聡子・中村照・松原昭・山川紀子 (2006) 「ラチャパットの観光学科のための観光日本語用シラバス」作成について『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第3号、pp97-106
- 花井慎行 (2009) 「『もう一度考える、みんなの仕事』 ラチャパットの日本語教育を考える会 第15回総会及びセミナー」『タウン』第47号 (バンコク日本文化センター発行)、pp23-25
- 春野愛・花井慎行・大谷つかさ・富吉結 (2009) 「ラチャパットの日本語教育を考える会」の紹介『タウン』第46号 (バンコク日本文化センター発行)、pp19-21
- 春野愛・東野佳与・花井慎行 (2009) 「『ラチャパットの日本語教育を考える会』によるラチャパット大学開講科目調査」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第6号、pp107-114
- 平川俊介 (2009) 「第2回ラチャパット大学日本語専攻 スピーチコンテスト」『タウン』第47号 (バンコク日本文化センター発行)、pp25-27
- 星井直子・石井薫 (1999) 「ラチャパット大学における日本語カリキュラム改訂の動き」『国際交流基金バンコク日本語センター紀要』第2号、pp15-23
- 三上直子 (1999) 「ラチャパット大学選択科目用教科書『NIHONGO SUKISUKI』開発の中間報告」『国際交流基金バンコク日本語センター紀要』第2号、pp1-7